

中長期にJ A経営に影響を与える外部環境の変化の3番目としてバーゼル3(新たな自己資本規制)の世界的な金融規制を挙げる事ができる。現在の規制はバーゼル2と呼ばれるものだが、2019年1月に国際決済銀行はバーゼル3といった規制に移行する予定だ。

バーゼル3になると、これまでの自己資本比率に加え、資本の質(普通株などで構成される狭義の自己資本比率7%以上)が問われる。

今まで資本に参入できなかった劣後ローン(特定の債権、または一般の債権より支払い順位が劣るローン)な

## 職場のマネジメント

83

ど、資本を補充する項目が狭義の自己資本比率では参入できなくなる。

このバーゼル3は金融危機の影響を受けているた

### バーゼル3の影響

また、自己資本比率規制だけではない。自己資本の何倍の資産

# 総合的な把握が必要

め、新たな自己資本比率規制では、好景時にはさらに資本の拡充を求められるなど景気変動への対応や、狭義の自己資本比率の水準によっては役員報酬の制限などが指導される。

従来、都市銀行はバーゼル3を念頭に資本調達を活

を動かしているかといった、レバレッジ(てこ)比率の規制が導入される。また、流動性規制では政府の支援ではなく、貯払いなどが自ら十分に行われるかを検証する。このため1カ月

のネット資金流出というストレス下で、キャッシュ

発化させてきた。J Aを考えた場合でも、内部留保が少ないJ Aではさらに資本の拡充が求められる。

また、自己資本比率規制

ロー(現金収支)が十分かという流動性カバレッジ(適用範囲)比率(LCR)、1年間の安定調達構造が十分かといった安定調達比率

ある。すべてのキャッシュフローの把握やコントロールは経営としてのリスクマネジメント自体にほかならない。

従って、バーゼル3やIFRS(国際財務報告基準)でも一定のリスクコントロールのレベルを前提とした枠組みであり、総合事業としての総合的リスクマネジメントの実践が重要である。

(J A総研主席研究員・加島徹)

(この項おわり。次回は1月5日付、日本ナレッジマネジメント学会国際部長・進博夫氏の「ヘッジファンドと投資」です)